

せりふの音について

鳴海四郎

戯曲のせりふというものは、本来、活字から読者の目に伝えるものではなくて、俳優の音声によって観客の耳に伝えるべきものである。したがって、ことばとしての伝達内容がその主目的であるにしても、音声のひびき効果との相乗作用によって、内容が一層鮮明に伝えられることもあれば、またその逆のこともありえるのである。

また、演劇という芸術では、せりふのことばはどんなに日常的な表現に見せかけられていても、それは日常語よりもはるかに次元の高い、密度の濃い、むだのない表現であるべきであろうし、また耳で聞いて直観的・感覚的に理解できるひびきでなければならぬし、同時に言語としての美と力も備えていることが望ましい。

英語の戯曲で、その理想に達している作家は言うまでもなく Shakespeare であろう。ことに音声表現の巧みさは拔群である。なにしろ、日本語で「芝居を見る」に相当することばをその全作品中 9カ所にわたって「hear a play」と言っているほどだ。明るい音・暗い音、固い音・柔かい音、重い音・軽い音、鋭い音・鈍い音などを時に応じて使いわけ適切な感情表現や、頭韻、脚韻、母音韻 (assonance)、子音韻 (consonance) 等の駆使、縁語、疊語等の配合、それらが弱強格 (iambus) のリズムで語られるときの効果はみごとというほかはない。その作品は詩的イメージの宝庫であると同時に、ことばの音楽の楽譜と言ってもよいだろう。

日本の劇作家でせりふのひびきをそこまで効果的に扱った人はいたろうか。明治以降それになんらかの考慮を払った人は数多いが、成果をあげた例は少ないようだ。木下順二氏は『暗い火花』(1950)で、いらだちの表現にk音の多用を試みたり、福田恆存氏は詩劇『明暗』(1956)で blank verse 的リズムの実験をしたが、私の見聞ではいずれも効果的とはいえなかった。

時代をさかのぼって、歌舞伎や能や狂言、さらにはせりふから遠ざかるが、浄瑠璃、謡曲、狂歌、どどいつ、川柳、俳句、和歌などの語り物文芸や詩歌の類も当ててみたが、頭韻、疊語、縁語、かけことば、擬声語・擬態語 (onomatopoeia)、それからその場かぎりの笑いをねらったごろ合わせ、もじり、だじゃれの類はあるけれども、音のひびき自体を芸術的かつ効果的に扱った例は、芭蕉のいくつかの俳句などを若干の例外として、ほとんどないにひとしい。七五調や五七調のリズムは際立っているものの、短音節で成り立っているという日本語の性質上、母音の長さは単調に短く、そのために母音も子音も英語とく

らべればかなり弱い発声になってしまうから、やむをえないことかもしれない。

しかし万葉時代にまでもどると、たとえば人麻呂の長歌や短歌などには、母音韻や子音韻を巧みに配合して Shakespeare にも接近できそうな、力強い‘音のうねり’も見いだされるのだ。やはり詩歌が、文字で発表される以前の朗誦芸術だった時代なればこそだろう。

英語の戯曲では、詩劇ではなく散文劇を書く現代作家であっても、音声上の効果を意識している人は数多い。たとえば Tennessee Williams における 1 音の多用 (e.g. *The Glass Menagerie*) や子音韻・母音韻の駆使 (e.g. *Suddenly Last Summer*) とか、Edward Albee の喜劇における、とぼけたような音の新造語 ‘bumble’ (baby の意) の連発 (*The American Dream*) や劇中の要所で使う p 音 k 音の ‘porcupine’ の反復 (*Who's Afraid of Virginia Woolf?*) などは、それらを翻訳した私の経験からいって、翻訳者泣かせの個所である。また Neil Simon は、劇中の老コメディアンの子せりふで、k 音の入る語 (e.g. ‘chicken’, ‘cookie’) はおかしいが、k 音のない語 (e.g. ‘tomato’, ‘roast beef’) には笑いがこないと言わせている (*The Sunshine Boys*)。

さて、Oscar Wilde の傑作ファルス *The Importance of Being Earnest* は、そもそも題名中からすでに同音異義語の遊びを仕込んでいるほどだから、‘Bunbury’ というとぼけた音の架空人名を縦横に駆使 (Bunburyist から Bunburying まで) するだけではない、開幕直後の十数分の間に、‘ぜいたくなキュウリ’を話題にして ‘cucumber’ という k 音の語を 8 回 (最初の四幕本では 9 回) も使っているのも、前述の諸例からも自明のように、その意味内容よりも笑いを誘い出す効果を意図していたからにはほかならない。

われわれは英語の戯曲を読むにあたっては、たんに活字を目で追って論理的にその意味を考えるだけでなく、その音のひびきやリズムにも耳を傾けて、感覚的に受けとめることも必要であると思う。戯曲を耳で読むことを提唱したい。

